

## <卒論>「菊花の約」論：その背反性の意味するもの

著者	田嶋 芳雄
雑誌名	日本文学誌要
巻	58
ページ	92-103
発行年	1998-07-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020032">http://hdl.handle.net/10114/00020032</a>

## 「菊花の約」論

——その背反性の意味するもの——

田嶋 芳雄

### 一

『雨月物語』の中で傑作と称される「菊花の約」はその研究の歴史を追ってみると、大きく二つの解釈の流れに分かれている。一つは、「菊花の約」は軍学者である赤穴宗右衛門が、命の恩人である博士の丈部左門と重陽の佳節の日に再会の約束を交し、その約束を果たすため、囚われの身であった自己の命を断ち、霊となつて左門の元を訪れるのだが、この二人の間に純粋な信義というものを見出し、その行為を肯定的に評価する方向である。もう一つの流れは、逆に宗右衛門と左門の間に存在したと考えられた、そのような信義を完全に疑う方向である。右に挙げた論の主なもの詳しく述べることはここでは避け必要があれば紹介するという形を取りたいが、注目したいのは、そのように正反対の解釈を許す「菊花の約」という作品の多面性である。「菊花の約」において、読者が最も感銘を受けるのは、宗右衛門が城に幽閉され、左門との約束を果たす事が困難な状

況になつてしまった時、自刃して霊となり遙かなたの国で待ちわびる左門の前に姿を現わし、約束を果たしたのち霧のように消えてゆくところであろう。そして宗右衛門のそうした行動に感銘を受けた読者は、この作品を信義談が描かれたもの、あるいは二人の美しい友情が描かれた物語として捉えるのである。「菊花の約」を論じる上で、この読者が直感的に選び取る信義談としてのイメージを無視することは出来ないと思う。この信義談としてのイメージに従つて二人の行為を正しいものとして捉える読み方は、読者に何とも言えない爽快感を与える。それゆえにそのイメージを崩さないようにするため、その快感に従つて作品を読み解く事になり、その結果として固定的な解釈しか許さなくなってしまう。だが一度そのイメージを断ち切った時この作品は全く別の様相を見せる。つまり二人の行動をどう解釈するかによって、作品の解釈もまた正反対の方向へすすんでゆく要素をこの作品は持っている。しかもそれでいて、どちらに進んだとしても、決定的なものを見出す前に何かしらの矛盾にぶつかってしまう。この「菊花の約」に潜む背反性と

も言える点の解決を本論において試みたいと思う。

## 二

青々たる春の柳、家園に種ることなかれ。交りは輕薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹に耐めや。輕薄の人は交りやすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども、輕薄の人絶て訪ふ日なし。

「菊花の約」は右のような教訓的な一節で始まる。そして物語の結末も「吝輕薄の人と交わりは結ぶべからずとなん」という冒頭と対応した一節で締めくくる。この冒頭で秋成は輕薄の者との関わりのはかなさや脆さを前面に押し出して語っているのだが、この文章も、「菊花の約」を二人の純粹な信義談として読む場合と、そのように読まない場合では解釈が異なってしまうのである。冒頭から読者は秋成に惑わされる事になる。まずこの「菊花の約」を二人の純粹な信義談として捉える立場、つまり肯定的立場から解釈すると、冒頭文は、本文の内容、つまり左門と宗右衛門の行為とは反対の事を述べている事になり、「(輕薄)」という言葉を読者に意識させておいて宗右衛門が約束を破りはしないかという不安を読者に抱かせてその不安を次々に高め、一挙に不安を解消させることによって一層強い感銘を与える効果を持つ」と評されたりもする。肯定論の根本にあるのは左門と宗右衛門の行為が輕薄とは反対のものであると疑わないことである。では何故そういう事になるのかと言えば、

私は「菊花の約」の典拠である「范巨卿鵲死生交」(以下「死生交」との関連性が見逃せないと思う。「菊花の約」の冒頭は「死生交」の冒頭部をそのまま利用したものであるということとは、既に良く知られている。そして「菊花の約」と「死生交」はその冒頭のみでなく、内容も共通する部分が多い。「菊花の約」において左門に相当する張劭と、宗右衛門に相当する范式は重陽の佳節に再会することを誓った。だが日常の忙しさの中で次第にその約束の日を忘れてしまった范式は、正に重陽の節句その日に思い出す。そこで約束を破ることによって張劭の信頼を失うことを恐れた范式は、宗右衛門と同じく自刃して靈魂になり再会の約束を果たし、信義を貫く。この物語の展開は「菊花の約」とほぼ同じである。明確な違いが現われるのは後半部である。「菊花の約」では宗右衛門の死を知った左門が、出雲に下り、赤穴丹治を討つのに対して「死生交」は、張劭は范式の里を訪れ、そこで范式の棺と対面し、靈となつてまでも范式が約束を果たしたことが夢でも幻想でもないことを確認する。更に張劭が訪れるまで埋葬することを禁じた彼の遺言を聞くと張劭は范式の棺の前で自ら命を絶ってしまうのである。「死生交」はその結末において、范式と張劭が信義の人として人々に祭られて、廟まで建てられたと後日談として丁寧すぎるくらい記されているので、冒頭の文章と范式と張劭が示したこの物語の主題が逆説であることが分かる。一方「菊花の約」も、結末において尼子経久が家臣(赤穴丹治)が討たれたのにもかかわらず、兄弟信義の篤きを憐れみ、左門をあえて追わなかったとあるため、両作品が同じ主張を述べる作品として解釈されているので

はないだろうか。だが秋成は「菊花の約」を、「死生交」の話をベースに作っているものの、「死生交」の結末のように二人の信義を強調するところまではしていない。あくまでも尼子経久一人が認めたに過ぎないのである。私は先に、二人の信義を肯定する読み方は、そう読む事から得られる高揚感を崩さないような読み方ではないか、という考えを述べたが、もしそうだとしたら、それでは何故、読者が高揚感を与えられるのかという問題が出てくるのである。その点を解決しない限り、この作品が二人の純粋な信義談を表わしたものとはい切り切れない。「死生交」は単に「菊花の約」の原典だけではなく、肯定的に読むことを正当化する大きな材料にさえなっているのだが、ただ当り前のことであるが「菊花の約」は「死生交」の焼き直しではない。この二つの作品の類似性から「菊花の約」の冒頭も同じく主題の逆説であると決めつけることは出来るものではない。

次に二人の間の純粋な信義を否定する論を（以下否定論）簡単にまとめてみると次のようになる。信義を貫くために自刃する宗右衛門の死に対しては、「約束を守るという目前の事に囚われてしまった人間の悲劇」<sup>(注②)</sup>、または「宗右衛門の自刃は物事に偏執する異常性の結果」<sup>(注③)</sup>と宗右衛門の死が信義の一言で美しく理解出来るものではないと捉えられる。また宗右衛門についても、左門の視点を経由して宗右衛門像が作られていること、宗右衛門の霊が語る自刃までの経過が後半部で余り説明されていなくて、宗右衛門の霊が語ったことが、そのまま事実として認識されてきたことから、「宗右衛門の霊が訪れた事の真偽さえ怪しく、宗右衛門を待ちわびた左門が見た幻想にすぎないのでは

ないか」<sup>(注④)</sup>と厳しく指摘する解釈もある。これらの否定論は二人の信義で、はつきり証明できない部分が残るところを無視せず、本文に描かれていることを細かく分析し、読者が何となく引きずられて行く信義談としてのイメージを覆えそうとする立場にあると思う。私が思うに宗右衛門の死は、この物語を、約束を守るという行為に代表される信義というモラルの点のみから見ると美しいが、それはまた信義を守ることが無条件に正しいという考えも含み持つ。いざそのモラルを少し離れて、宗右衛門の死だけを取り出せば一種の異様さも見えてくる。そして一文一文調べて行けば二人の性格や行動にも、信義談として描いた作品のイメージに些かふさわしくない所が確かに存在するのである。この点の具体的な指摘は後の私なりの「菊花の約」の解釈の所にも共通する部分があるので、後に譲るが、二人の自然な点を拡大して捉え直すと、信義談としてのイメージは覆えられる。そうすると先程の冒頭の一節の「軽薄の人」という言葉は、迷い無く自刃した宗右衛門のことを示している可能性もあるし、その宗右衛門を信義の人と疑うこと無く出雲まで出向いて赤穴丹治を討った左門のことを示している可能性もあるのである。「菊花の約」の冒頭は秋成が「死生交」からわざわざ引用したものであり、そこには何か強い意図があるはずである。しかしこの作品の本文に書かれている主題がはつきりしない、と、この冒頭の意味するところも分からないし、様々な解釈の可能性を残しているのである。そう考えるとこの冒頭の一節は秋成が読者に投げかけた質問状のようにさえ思えてくる。そして結末部を再び同じ言葉で締めくくるのは一種の答えの催促の

ようでもある。だが従来の解釈は宗右衛門と左門の信義を肯定、或いは否定する形だけでその答えを出そうとしていたような気がしてならない。そもそもこの「菊花の約」は果たしてこれまでの、「菊花の約」を論じたもののようにはつきりと宗右衛門と左門の信義の肯定、否定だけで捉えられるものなのだろうか。肯定論も否定論も何らかの矛盾を抱えているし、それらは、左門と宗右衛門の信義に白・黒をつけようと固執しすぎているように思える。私はむしろ肯定論と否定論を昇華する形で新たな方向性を探る方が良いのではないかと思う。

### 三

「菊花の約」には、左門、宗右衛門を中心に赤穴丹治、尼子経久そして左門の母といった人物たちが登場するのであるが、その中でもとりわけ左門の役割というものが大きいように思われる。「菊花の約」の本質に触れるためには、主人公の左門をじっくり検討する必要がある。

左門は「清貧をあまね想いて、友とする書の外はすべて調度のうちわしき絮煩を厭う」という人物である。この記述の解釈について、青木正次氏の論によると「彼のいかにも学者らしい高潔な人格や態度を表わす理念的表現だが、裏返して現実的にみればそれは日常生活の自然についてまったく意識や配慮を欠いた世間知らず、という危うい心を、そうとも知らず露わしたものである」ということになる。このように左門を捉えることは青木氏に限ったことではなく、既に一般論として成り立っているような感じも

する。私としても左門には書物しか友とするものがなく、一種の閉鎖性を帯びていることは認めるのだが、日常生活に全く配慮していなかったという考えには少し異なる感じを覚える。左門には同じ里の佐用氏のもとに嫁いだ妹がいるのだが、彼女が嫁として迎えられた背景には「(佐用氏が)丈部親子の賢きを慕い、娘子を娶りて親族となり」と左門の賢さが原因していると述べられる。ということは彼の賢さは里の中である程度の公共性を得ていたのではないだろうか。左門は普段は自己の研究に生きているので、積極的には日常というものには関係を持たないものの、日常生活の自然について全く意識の外に置いていたのではなく、そつと傍観していたのではないだろうか。左門が宗右衛門出会った日の事については「一日左門、同じ里の何某が許に訪ひていにしえ今の物がたりして興あるときに」と記されている。ここで左門が日常から全く離れた存在でないことがわかる。もし左門が自己の知識だけを振りかざしていたならば、知人と興が深まることがあるだろうか。左門と里人たちは談話程度のものなら語り合う事は可能であった。だが話が高度の次元になってゆくと、里人たちは左門との会話に付いて行くことも、質問することも出来なくなってしまう最終的には里人達は話の聞き役になって、左門の話に頷くのみになってしまうのである。そしてそういう特別視される場合、一種の孤独感が生じるものである。そしてそのような左門にたいする人物として外部から宗右衛門が設定される。左門は単に書物だけを友とし、世俗の動きに無関心だった訳ではなく、世俗との付き合いはあるが、真の意味で人と交わる事が出来ず、日常の動きはまるで

別世界の動きのように感じたため、再び書物の世界に没頭して  
いると解釈出来るのではないか。左門は知人の家に、病身であ  
りながら、だれからも顧みられない客がいること知ったとき、  
進んで看病することを買って出る。だが知人は「瘟病はひとを  
過つ物と聞ゆるから家童<sup>わらべ</sup>らもあえてかしこには行かしめず。立  
よりて身を害し給うことなかれ」と左門のためを思い、近づか  
ない方が良くと忠告する。だが左門は「死生命あり。何の病か  
人に伝うべき。これらは愚俗のことばにて吾<sup>わがともがら</sup>們はとらず」と聞  
き入れない。だが左門は知人の言葉を愚俗のものとして馬鹿に  
している訳ではない。ただ観察し続けた日常社会に溢れる通念  
を、別世界のものとして客観的に捉えるようになっていたため、  
敢えてそれを避け、自己の方法を押し通そうとしただけなので  
ある。つまり左門は日常社会を全く知らなかったのではなく、  
知ってはいたが、左門自身が居心地の悪い世界だと判断し、そ  
こから少し距離を置き、書物の世界に入っていったのではない  
だろうか。私は左門のそのように何処か追い込まれた状態を見  
逃してはならないと思う。そうしなければ何故に宗右衛門に対  
して左門が過度に魅了されたのか説明がつかない。そしてその  
ことに注意すれば、二人が義兄弟の契りを交して、宗右衛門が  
左門の母に合うことを希望した時の、左門の「母なるもの常に  
我孤独を憂ふ。」という言葉が一層響いてくる。

ところで左門が里のなかである程度の評価を得ていようと  
も、彼が家に帰れば母の保養を受ける者でしかないという現実  
がある。左門の性格を探る上で、左門の一番身近にいてありの  
ままの左門を知る母の視点から左門を探ることは欠かせないこ

とである。左門と宗右衛門が再会の日と定めた重陽の佳節のま  
さにその日、日は刻々と過ぎ去っているのに、なかなか宗右衛  
門が訪れて来ない事に対して左門が焦り、不安の色を見せると、  
「人の心は秋にはあらずとも、菊の色こきはけふのみかは。帰り  
くる信<sup>まこと</sup>だにあれば、空は時雨にうつりゆくとも何をか怨むべき。  
入て臥<sup>ふし</sup>もして、また翌の日を待べし。」と諭す。さらに宗右衛門  
が自刃して魂のみが約束を果たすために家を訪れたことを左門  
が悟り、宗右衛門の死に取り乱していた所に、目を覚ました母  
親は「伯氏<sup>あに</sup>赤穴が約にたがうを怨るとならば、明日なんもし来  
るには言<sup>ことば</sup>なからんものを。汝かくまでをさなくも愚なるか」と  
厳しく言い放ち、左門の激しい動揺を諫める。左門の母がこの  
ように左門に忠告をするのは一部で「母が左門の高潔さにとも  
なう彼の幼児性をも見通しているから」という意見もある。だ  
が私は幼児性という一面のみではなく、さらに深い所まで見通  
していると思う。左門は約束の日いつ宗右衛門が訪れてもいい  
ように朝早くから準備に追われていた。そうすることは彼の宗  
右衛門に対する誠意だったのである。だが宗右衛門が、なかな  
か訪れないことに次第に焦りだし、最後には夢うつつの状態に  
陥ってしまう。ここで考えたいのはもし宗右衛門が訪れる事が  
なく、約束が破られた時の左門が受ける（精神的）衝撃である。  
もう少しで約束の日が過ぎようとしている時点で左門は相当の  
衝撃を受けている。宗右衛門に心変わり無く、来訪の誠意さ  
えあればそれで良いのだから寛大に待つべきであるとの母の忠  
告も心から受け入れる事が出来ない。それでは宗右衛門を本当  
の意味で信じていないことにもなりうるからである。左門は約

束のその日だけを実直に待ち続けるのである。母が心配するのはそのように物事を真直ぐに考えすぎる左門の純粹性ではないだろうか。宗右衛門の来訪が適わなかった場合、真直ぐな心を持つ左門がどれほどの衝撃を受け、左門がどのような状態に陥るか計り知れないから母は敢えて厳しい言葉で左門を諫め、その衝撃から左門を守ろうとしているように思える。左門の性格にはこの純粹さと実直さが根本的にあるようである。そして左門の純粹性というのは、この物語を解釈する上で、絶えず意識しておくてはならない点である。彼はその実直な心に従い、清貧の士として生き、學問に専念した。その純粹な心は左門の美点であり魅力なのである。しかしその一方でその心が挫かれたときや、道を踏み外した時は、その純粹さゆえにどうなるか計り知れない。母が危惧するのは純粹性の反動ともいうべき点である。幼児性というのは、純粹性、つまり無垢な心の一面的な部分でしかなく、左門が幼児性で満たされているという訳では決してない。

#### 四

「菊花の約」の主題を解き明かす上で重要な事は、左門に大きな影響を与えた宗右衛門の自刃をどのように解釈すれば良いかということである。宗右衛門の死を信義の行動として受け入れるのと、全く認めないのでは、物語の解釈は別の方向にゆくからである。つまりこの宗右衛門の自刃をどう読み解くかが物語の多様な解釈を生じさせてしまうポイントであるといえる。

そのためにここからは少し宗右衛門に焦点をあてて「菊花の約」を読み進めてみたい。宗右衛門は主君である塩冶掃部介えんやかもんのすけの死を、派遣先の近江の佐々木氏綱のもとで聞き、そこで塩冶を討った尼子経久あまこつねひさを討つように氏綱に奨めた。だが佐々木氏綱は尼子経久を討つどころか、逆に宗右衛門を近江に止めておこうとした。そのことに失望した宗右衛門は「故なき所に居らじと」と出雲に帰る途中の不慮の病で左門の里に長く滞在するようになったのである。

そこで左門の誠意ある介護を受けて病は次第に回復する。宗右衛門が回復した後、左門は宗右衛門と連日物語をして日を過ごす。宗右衛門は軍学者であり、彼も學問に明るかったので、「赤穴も諸氏百家のことおろおろかたり出て、問わきまふる心愚ならず。」と宗右衛門は左門に一方的に語らせるようなことはない。宗右衛門は左門が觀念的な思想のことを話せば、それに対して自分の専門である兵法の理ことわりを控えめに語る。左門はどちらかと言えば觀念的思想を得意として、それに対する宗右衛門は戦いを前提とする実践的思想に明るかった。だが左門と宗右衛門は文学という共通項で繋がっているからという理由のみで深い親交を交わしたわけでもない。確かに二人は共に智に生きる者であった。だが儒学者と軍学者という違いもあったのである。それでは秋成にとつて學問に生きる者の交わりがどのようなものであったかについてを知る上で、『胆大小心録』の中に次のような興味深い文がある。

老、文雅に友なしといへども、日夜枕に窓に來たる人あり。

某外は我をしるとのみの人なり。是も多からず。(略)拙なりといへども、我をなぐさむる心、人のなぐさむとは異なり。我非彼是、彼是我非、我陀彼非のたがひなり。知己と云ふは必ずよく文を玩ぶ人にあらず。文の意をしりて問ひかわす人なり。<sup>(注⑦)</sup>  
(一三九)

秋成にとつて友と言えるのは日夜枕辺や窓辺に訪れる人だけで、その他の者はただ知り合いという程にすぎない。つまり空想の中で対話を交す相手しか自分にとつて友と呼べる者がいないと言う。秋成にとつての知己とは、決して単に学問に従事する人のことではなく、書物を味読して、疑問を交換出来る人のことである。そしてその考えは「左門はよき友もとめたりとて、日夜交はりて物がたりす(る)に、赤穴も諸氏百家のことおろおろかたり出て、問わきまふる心愚ならず」という描写に重ね合わすことが出来るのではないか。左門と宗右衛門は単に文人だからということではなく、対話を交し物がたりすることが出来、さらにお互いを高め合う事が出来たから、深い親交を交し、義兄弟にさえなつたのである。この左門と宗右衛門の物がたりを交し合う描写に、秋成の文人としての真の知己についての理想が表出されていると思う。

左門と義兄弟の契りを結んだこの瞬間は宗右衛門にとつても最良の瞬間であつたに違いない。宗右衛門は左門の母に「吾いま母公の慈愛をかうむり、賢弟の敬を納むる。何の望みかこれに過べき。」と語っている。しかしそうであつたのに宗右衛門は突然、左門たちと一時別れて、旧主であつた塩冶掃部介がいた

出雲へ行き、塩冶掃部介亡き後の情勢を調べに行くと言ふ。彼は左門やその母と一緒にそのままそこに定住することも可能であつたにもかかわらず、出し抜けに別れを切り出す。私はここに簡単には消えない宗右衛門の塩冶に対する信義を見る。宗右衛門は出雲へ急いで帰る途中であつた。左門との出会いによつて中断されたものの宗右衛門の中で塩冶のことは、まだ解決していなかつた。というのも宗右衛門が左門の母に述べた「大丈夫は義を重しとす」という言葉は彼の信念であり、何も左門だけに向けられた言葉ではないからである。彼は左門の家族と暮らす前に、旧主塩冶との関係にけじめを付けようとしていたのではないだろうか。

宗右衛門が出雲に旅立つことを聞いた左門は必死になり、再会の約束を取り付けようとする。左門にとつて宗右衛門は自己を啓発してくれる、始めての友(兄)と呼べる存在であり、一時的であるとはいへ、宗右衛門と別れることは大きな苦痛であつたに違いない。そのために「さあらば(一時的に出雲に帰るだけならば)兄長いつの時に帰るべき」という。これに對して宗右衛門は「月日は逝きやすし。おそくとも此秋は過ぎじ。」と漠然としたことしか答えない。しかしそれでは満足出来ない左門は「秋はいつの日を定て待べきや。ねがふは約し給え。」と更に一步踏み込んで左門に迫る。そして重陽の佳節に約束を取り付けてささやかな安心を獲得する。ところでこの約束について少し視点を変えて考えてみたい。宗右衛門は軍学者とはいへども武士であり、時代は戦国時代である。この二つの要素はこの約束の中に、ある別の意味も内包されているのではないだ



ろうか。武家は仮に一大事がおこった時には命を保証しがたいものであるから、長い先のことにについての約束などめつたに交わせるものではない。ところが宗右衛門は出雲という旧主の仇がいる国に行くにもかかわらず、初夏の別れにおいて、重陽の佳節と期日まで定めて比較的先の事について約束を交している。宗右衛門はこのとき左門やその母のことが既に大切なものになっていたので、当然左門との約束を軽々しく交わしたわけではないだろう。宗右衛門は始め「おそくとも此秋は過ぎ」とぼかして答えている。だが再会の日が重陽の佳節と成立した瞬間、再会の確定性を期し、左門に安心感を与えると同時に、破られる可能性（宗右衛門が約束のために、悲劇にまきこまれる可能性）も生じ始めていたと言えるのではないだろうか。彼はこの約束により、自分を律するものを一つ作ってしまったのだから。宗右衛門は確かにこの物語が於いて約束を遵守したのであるが、それは彼が靈魂の状態を訪れるという非現実的な現象によって成り立ったものである。それを現実的な目でみると、宗右衛門は完全な形で約束を果たす事は出来なかったわけでもある。

宗右衛門は菊花の約を残し、出雲に戻って見たが出雲の国は既に「国人大かた経久が勢ひに服て、塩冶の恩を顧るものなし」という状態であった。出雲は完全に尼子経久によって平定され宗右衛門は経久をどうすることも出来ない状態になっていた。秋成がわざわざ「塩冶の恩を顧るものなし」と記述した裏には、宗右衛門は一人その恩を忘れていないことを明らかにする働きがあると思われる。だが宗右衛門は従兄の赤穴丹治の誘いに応

じて、一時的に経久のもとに留まることになる。そこで宗右衛門が経久を観察する目は鋭い。「万夫の雄人に勝れ、よく士卒を習錬といへども」と経久に対して一定の評価を与えるものの、「智をもちうるに孤疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし」と、その人間的資質の欠陥と、それに伴い経久の家臣達の結束がそれほど高くないことまで見抜いている。結局、経久の下に居ても無益であると考えた宗右衛門は、去ろうとする。すると経久は宗右衛門を幽閉して城から出さないように赤穴丹治に命令する。経久は宗右衛門の態度に機嫌を損ねただけでなくて、将来的に宗右衛門が危険な人物に成りうる可能性を感じ取ったのであろう。宗右衛門は経久が最も警戒する智者である。

どうにも左門との約束が果たされないと分かった時、宗右衛門は死を以て左門のもとに訪れようと思いつく。彼は自刃して友（弟）に対しての信義を貫こうとしたのである。宗右衛門（の霊）は左門に「此約にたがふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども」と語り、そして、自刃して訪れた事を告白するが、ここで宗右衛門は決して左門のために死んだということを押し付けがましく言ったのではない。むしろ相手が左門だから死ねたという事、左門のために死ぬのなら、死もまた悪いものではないことを必死に告白している所なのである。宗右衛門にとつては左門のために死に、信義を貫けるのなら死もまた悪くない、肯定的なものだったのである。そしてそのような感情を引き起こさせるような者と出会えた、宗右衛門の人生は、たとえ自刃による死という結末で終わるとしても、報われないものだっただけとは言いい切れないのではないだろう

か。宗右衛門の霊は最後に「この心をあはれみ給へ」と左門に告げる。この宗右衛門が語る「あはれみ」という言葉の真意は、単にそうするしかなかったことを不憫に思ってもらいたかったのではなく、宗右衛門の心を汲み取り、左門だけを残して行くその行為を受け入れて欲しかったのであろう。そうすることで宗右衛門は報われる事にもなるのである。そして宗右衛門は「今は永きわかれなり。只母公によくつかへ給へ」と言つて消えて行く。宗右衛門の死は彼の中で完結しており、左門に何かを託すという感じではない。

## 五

宗右衛門の死を知った左門が出雲へ旅立つ「菊花の約」の後半は、原典の「死生交」と大きく趣を異にする事は前にも述べたが、この結末の違いによって、秋成が「菊花の約」を単なる「死生交」の焼き直しにすることを避けた事が分かる。ならば何故、後半部を変えたのかを考えて解釈しなければならぬ。

宗右衛門の霊と再会した左門は、母に出雲行きを告げる。ここに左門が宗右衛門の死に衝撃を受けて、自身の学んできた觀念を実践に移そうとする心境の変化が読み取れる。私は先に宗右衛門の死は彼自身の中で完結しているのでは、と述べたが、そのような意図とは関係なく彼の死は、左門に何かの行動を起こさせるべく突き動かしたのである。そしてそのような感情が起こった要因の一つとして、私は死者と生者の関係があるのではないかと思う。厳しい見方をすれば左門が強引とも呼べる程

の態度をもって再会の約束を取り決めた事が、宗右衛門の自刃の要因の一つになったとも考えられるからである。菊花の約というものは二人のものである。だが左門が強いて望んだ約束のために宗右衛門が命を懸けたのに対して、左門は生き続けているのである。左門は約束の日は確かに料理の準備などで誠意を尽くしていた。だが宗右衛門の行った行動に比べれば差がありすぎる。その一つの約束に対する行動の差は左門に何とも言えぬ複雑な感情を起こさせたはずである。そしてその差が埋らない限り左門のそのような感情は満たされない。左門は母に出雲に行く理由として「小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。」と語り、信義に応じて宗右衛門の霊の鎮魂の旅へと向かおうとする。そして宗右衛門を弔うための旅は、同時に左門のやりきれない精神の救済を求める旅でもあると私は考える。それが左門の「せめて」の行為なのである。左門は宗右衛門に対しての何とも言いようのない感情の解消を望んでいるが、霊魂の宗右衛門が左門にしたことの逆の事、つまり生者の左門の方から死者である宗右衛門と交流することが出来ないため何によってそれが可能なのか、結局の所は分からない。そこに左門の悲劇がある。それが分からないために、左門が最も良く理解出来る宗右衛門の信義という一点にのみ焦点を搾り、それに同じく信義で応じようという考えに囚われてしまう。そこに一つの解答を導き出した左門は、その純粋な性格から激情に流されて行く。

宗右衛門の霊を慰めるために旅立った左門であるが、出雲に付いた左門はいきなり赤穴丹治宅を訪れ、『史記』の中にある「商

「商鞅叔座」の話を引き合いに出し、従兄である宗右衛門を幽閉した丹治の不義を責める。「商鞅叔座」の話とは簡単に言くと、病身の宰相である公叔座に魏王が後任の宰相を誰にすべきか尋ねた時、公叔座は弟子の商鞅を推薦し、もし彼を後任にしない場合は、敵国に商鞅が渡ると魏の脅威になるので殺してでも魏から出すなと魏王に言う。しかしその一方で、魏王に商鞅を後任にする気配がないので、商鞅にも早く魏を去る事を奨める話で、左門にとってこの話は君主と弟子の両者に上手く義を通した話として捉えられている。左門はその「商鞅叔座」の話を引き合いに出し、丹治も公叔座のように経久と宗右衛門の両者に義を貫く形で、宗右衛門を早く城から逃がすべきであったのに、そうしなかった事の罪を丹治につきつける。この「商鞅叔座」の話は丹治の罪を明確にするための役割を果たしていると考えられるのであるが、これは左門が提出した一つの論理にしか過ぎないとも言える。商鞅叔座の話を聞いた丹治は「丹治只頭を低<sup>たな</sup>て言<sup>ことば</sup>なし」という反応をみせる。しかしこの態度が左門の言葉に反論できないからなのか、それとも突然の来訪者の繰り出す話に困惑した態度なのか良くわからないのである。左門は「商鞅叔座」の話を出した事で、自己の意見が真理であると確信している風でもあるが、それは問い詰めてゆくと単なるまやかしの真理かもしれない。左門は「商鞅叔座」の話の後、一方的に丹治の罪を並べ立て、そして切りつける。一太刀のもとに斬られた丹治には、左門の話に対する反論の機会さえも与えられなかったのである。左門の語った「商鞅叔座」の話は、丹治に罪を認識させることを目的にしているというより、むしろ丹

治を討つことに正当性を見い出すために、左門が作りだした自分勝手な論理にしかすぎないと言えないだろうか。人間は自己の行為が正義や正しいことのためと思うと、何でも出来るものであるから。

左門は丹治を討ったが、そもそも宗右衛門は丹治を討つことを望んでいたであろうか。宗右衛門が望んだ事は、左門が母と平穩に暮らすことにあったと私は思う。左門はこのような時こそ智に生きる者として何をするべきか、考えなければならぬはずなのに激情に流されてしまう。左門は宗右衛門の事を思い丹治を討ったのだが、結局宗右衛門の敵である経久の恩恵を被り、無事に出雲から逃走する。このように宗右衛門の仇敵に生かされた左門は宗右衛門の霊を本当の意味で慰められたのであろうか。

後半部の物語は、義に染まった左門の迷走が主題となっている。左門は信義というモラルに従うために村を飛び出したが、その一方で母に対する孝を崩壊させているのである。左門がすべき事は、宗右衛門の死を受け入れ、母と二人で新たな人生歩む事を願った宗右衛門の「こころ」を汲み取り、それに応える事であったのである。だが宗右衛門の死に囚われて、丹治を討つという左門の行った行動は彼の信義に応えるに適した方法ではなかったように思える。そのため彼は本来の目的であった「せめてもの信」を果たしたとは考えにくく、後半部の左門の一連の行動は軽薄なものとして考える事が出来るのではないだろうか。

## 六

これまで述べてきた事が、私の「菊花の約」の解釈である。

しかし、矛盾しているかもしれないが、それでも宗右衛門と左門の純粋な信義談として読まれる運命をこの作品は背負っているとも思ふのである。左門が丹治を討つ事が、宗右衛門の信義に応じるのにふさわしい方法であると解釈すると、この作品は宗右衛門と左門の両者が信義を貫いた作品として、とても美しく収まる。私は秋成はこのように二人の純粋な信義談として読むことも可能に、いやむしろ二人の信義談として読者に無意識の内に認識させるように一部で誘導していると考える。秋成はこの作品のいたる所に多くの「信義」という言葉を滑りこませている。だが、宗右衛門が丹治に幽閉され自刃した事を全くの不幸な出来事として捉えて、その事にのみに同情することを避け、宗右衛門の自刃の中にある、生涯で命を懸けても惜しくないと考える程の友（弟）に出会い、その者の信賴を最後まで失う事なく死ねた事への悲しくも何処か幸せそうな心、その幸福感は確実に書かれている。しかし、その心を正しく解釈すれば、左門が丹治を討つという行動は、宗右衛門の信義に応じたものではなく、暴挙でしかない。宗右衛門の自刃は彼の中で完結していたのに、結局は左門に自己の死を押し付けただけの結果になり、自刃に対して理解を得ようとした宗右衛門の願いは、叶えられなかった事になる。では秋成が多様な解釈を許すような作品を書いた事に、何の意味があるのかを考えてみたい。

「菊花の約」は、既に言われているように、秋成のモラルに対する考えと深い関わりがあるようである。宗右衛門のように、どのような状況にあらうとも約束を守る姿には、誰でも心を動かされる。そしてそれに必死に応じようとする左門。これは秋成が「死生交」からヒントを得た信義を守る事、と言うよりもモラルを遵守する事の美しさを、まず何よりも読者に訴える。しかし秋成はモラルを守る事の美しさだけを安易に伝える事はせず、その美しさの裏に潜むものの描写も怠らない。モラルを守れば、それが全て正しいとは秋成は語ってくれないのである。宗右衛門の死を受けた左門は直情に任せて出雲へ向かい、一連の行動をとる。この時の左門は信義に応じる事、つまりモラルに従う事にのみ囚われて、自己の行為に迷いを全く見せない。迷うどころか、左門は自分の行動や、丹治に提示した理論の正当性について考える事自体を拒否している。後半部の左門は既にモラルを理由に考える事をやめている。これは人間にとってとはとても怖い状態である。読者が左門のそうした心を意識した時、イデオロギーに囚われ、思考を停止した者の怖さを知る。更に左門の行動をそれまでに肯定的に捉えていた読者は、それを支持した自分もまた、モラルを遵守することは、正しい事だと、一つの思考に囚われていた事を知るのである。秋成はこのような自己批評的な効果を期待して、敢えて二人の純粋な信義談として成り立つように誘導したのではないだろうか。まだ信義の美しさにのみ目を奪われて、感動している内は、左門の行為に何の疑問も生じる事がなく、左門の行為が実は彼の暴走であるとは夢にも思わない。しかし何度か読み返していく上で、

美しく仕上げた信義談の裏に隠されたものに気が付いた時、今まで意識の外にあった作品の真意が鮮明に浮かび上がるという効果を期待して。つまり「菊花の約」という作品は、宗右衛門の自刃を契機として、そこから左門の行為を信義に應じるためと解釈する事と、反対に左門の暴走と解釈することの両方が成り立つ事が可能になるように創作されたものであると考える。ただし双方の意味を、同時に認識する事はできない。あくまでも読者には一度に一つの物語しか出現しないのである。左門の行動を信義に應じたものであると捉えている時、同時に左門が暴走しているとは捉えられないのである。一つの解釈をしている時、もう一つの解釈は意識の外にある。だが何かのきっかけで、作品の受け取り手である読者が、別の読み方を選択したとき、意識の外にあったものが、それまでの解釈方法と交代するのである。「菊花の約」の物語は一つしかなく、だれが読んでも物理的には同じものである、だがそこから読者が受け取るメッセージは、同じではないのである。だが二つの解釈が可能になるように工夫されているとはいえ、その二つが同時に正しいという訳でもない。それならば、秋成が物語の解釈の全てを読者に預けて、彼がこの作品で言わんとする事の核心は無という事になるからである。私はこの「菊花の約」の認識の順番として、まずモラルの美しさを認識させて、その後にモラルの怖さに気付かせてその印象を深めるため、どちらかといえば、まず信義談として捉えるように誘導していると思う。だがやはり主題はその後に気付く、左門の暴走を考えさせてゆく事にあるのではないかだろうか。

秋成はこのような技法を施し、モラルというものを枠組みにして、その中に美しさ、悲しさ、怖さ、そして愚かさという全く相反する価値を、一つの作品の中に提示したのである。そしてそれは、自刃した宗右衛門の心を如何に解釈するかという微妙なバランスの上に成りたっていると思うのである。モラルの美しさ、或いは愚かさをストレートに見せてくれれば、読者はある意味で楽であつたかもしれない。だが秋成はモラルについての美と怖さという相反する価値を、一つの作品の中で示し、しかも一つ誤ればどちらかの意味を消滅しかねないほどのぎりぎりの所で成り立たせているために、読者はこの物語をモラルについての話という、表面的な事ではなく、そのモラルというもの人間とどのように関わっているのかというモラルそのものについて考えなければならぬ。そこに秋成の厳しさがある。解釈の仕方一つで全く逆の結論に結び付く要素を持つこの「菊花の約」は、決して構成に欠陥のある作品ではなく、解釈を巡って考える事に価値がある、「深さ」を持った作品であると私は思う。

(注)

- ①、「雨月物語評釈」 重友毅 明治書院
- ②、「上田秋成文学の研究」 大輪靖宏 笠間書院
- ③、「雨月物語」その闇と光 青木正次 (藤女子大学短期大学紀要)
- ④、「雨月物語の探究」 「菊花の約」——左門幻想—— 元田興一 翰林書院
- ⑤、「雨月物語(上) 全訳注」 青木正次 講談社学術文庫
- ⑥、「雨月物語の研究」 「菊花の約」 秩序と反逆 植田一夫 桜風社
- ⑦、「上田秋成集」 「肝大小心録」 日本古典文学大系56 岩波書店

(たじま よしお・一九九八年卒)